

ラップ曲の歌詞の有無によるリラクゼーション効果の検討

○森川貴嗣¹・彦次佳²・亀島信也³・長田典子¹(¹関西学院大学理工学研究科/感性価値創造研究センター・²和歌山大学³関西福祉科学大学)

キーワード：音楽 歌詞 気分

Investigation of Relaxation Effect by Presence or Absence of Lyrics of Rap Songs

Takashi MORIKAWA¹, Kei HIKOJI², Shinya KAMESHIMA³ and Noriko NAGATA¹(¹Graduate School of Science and Technology, Kwansai Gakuin Univ., ²Wakayama Univ., ³Kansai Univ of Welfare Sciences.)

Key Words: Music lyrics Relaxation

目 的

本研究ではラップ曲の歌詞の有無によるリラクゼーション効果について検討した。これまで、音楽がヒトにどのような影響を与えるのか、という研究は音楽全体の効果測定やリズムや音程、テンポなどに注目した感情判定は行われている。歌詞の研究に焦点を当てると、Stratton & Zalanowski (1994) や Sousou (1997) など歌詞の気分を与える影響を検討しているが、「楽しい」「悲しい」という気分の評定を行なっているが、一貫した結果が得られていない。リラクゼーション効果に焦点を当てると、我が国では、渡邊・高上 (2009)、海外では Davis et. al (2008) など音楽のリラクゼーション効果について検討している。しかし、音楽の有無での検討や、自己選択曲での検討しか行われていない。とりわけ、同じ楽曲の歌詞の有無での検討は少なく、ラップ音楽を用いた検討は皆無である。そこで本研究では、歌詞が含まれるラップ曲を用いて、歌詞あり試聴群と、同楽曲のインストゥルメンタル試聴群、歌詞を読む群の3群の比較を行いリラクゼーション効果について複数曲を用いて検証する。

方 法

実験参加者：7大学の大学生145名(男性115名 女性30名)。平均年齢19.66歳

使用尺度・質問項目：①11段階リッカート法(“気持ちがゆったりした”)②TMDS-ST (Two-dimensional Mood Scale-Short Term)。

使用楽曲：GAKU-MC「ついてない1日の終わりに」、AK-69「上ヲ向イテ」、強「笑って行こうぜ」以上3曲其々の歌詞ありバージョン、インストゥルメンタル、歌詞を使用。実験曲の選定基準はラップ曲である事を基準に選定した。

実験手続き：実験条件の統制を図るために、各大学7クラスの授業開始30分間を用いて実験を行った。各クラス共に実験開始時に音楽の嗜好性に関するアンケートとTMDS-STを実施した。その後、各曲の歌詞あり、インストゥルメンタル、歌詞のみの3曲試聴した。各曲の試聴後にTMDS-STとリッカート法の評定を行った。楽曲は同じ曲が重複しないように組み合わせを考慮して行った。

データ分析：歌詞の有無が学生の気分に影響するかを検討するため各曲の①11段階リッカート法②TMDS-STの歌詞あり、インストゥルメンタル、歌詞のみの得点の各項目について分散分析を行った。

結 果

①各曲の11段階リッカート法で測定された“気持ちがゆったりした”項目の平均得点を一元配置の分散分析した結果から GAKU-MC「ついてない1日の終わりに」では($F(2, 141)=6.383, p<.05$)、AK-69「上ヲ向イテ」では

($F(2, 121)=3.271, p<.05$)、強「笑って行こうぜ」では($F(2, 141)=7.129, p<.01$)において、条件間に対する有意な主効果がみられた。多重比較(LSD法)を行った結果、“気持ちがゆったりした”項目では全ての楽曲でインストゥルメンタル群と歌詞あり試聴群、インストゥルメンタル試聴群と歌詞を読む群においてインストゥルメンタル群に有意に平均点が高かった(いずれも $p<.05$)。

②各曲のTMDS-STで測定された“リラックスした”項目の平均得点を一元配置の分散分析した結果から GAKU-MC「ついてない1日の終わりに」では($F(2, 142)=3.822, p<.05$)、AK-69「上ヲ向イテ」では($F(2, 121)=3.324, p<.05$)、強「笑って行こうぜ」では($F(2, 141)=8.367, p<.01$)。において主効果が有意にみられた。多重比較(LSD法)を行った結果、“リラックスした”項目では全ての楽曲でインストゥルメンタル試聴群と歌詞あり試聴群、インストゥルメンタル試聴群と歌詞を読む群においてインストゥルメンタル試聴群に有意に平均点が高かった(いずれも $p<.05$)。

考 察

各項目を検討すると、リッカート法の“気持ちがゆったりした”項目に有意な差がみられ、TMDS-ST得点の“リラックスした”項目に有意な差がみられた結果からインストゥルメンタルは歌詞のある曲よりも歌詞を読むだけよりも気持ちがゆったりする事が示唆された。

今後は、さらに生理指標を用いた追加実験を行うなど、より客観的なデータからも説明が必要だと考えられる。また、被験者がリラックス出来ると信じている自己選択曲内での比較検討も必要だと考えられる。加えて今回は対象が大学生であったが、年代の違いも検討しなければならない。

引用文献

- 1) Stratton, V. N., & Zalanowski, A. H. (1994). Affective impact of music vs. lyrics. *Empirical Studies of the Arts*, 12(2), 173-184.
- 2) Sousou, S. D. (1997). Effects of melody and lyrics on mood and memory. *Perceptual and motor skills*, 85(1), 31-40.
- 3) 渡邊志, & 高上僚一. (2009). 同一吹奏楽曲の反復聴取による心拍変動の解析. *バイオメディカル・フアジィ・システム学会誌*, 11(1), 57-60.
- 4) Davis, W. B., Gfeller, K. E., & Thaut, M. H. (2008). *An introduction to music therapy: Theory and practice*. American Music Therapy Association. 8455 Colesville Road Suite 1000, Silver Spring, MD 20910.

問い合わせ先

森川貴嗣 takamc29@gmail.com